

読書通信



No. 205

① 著者が雑誌に永く連載してきた宗教論が一冊にまとまった。寺島実郎『人間と宗教』（岩波書店、2200円）は世界宗教誕生からビザンツ帝国における一宗教、そして近代日本の宗教までの幅広い話題と、宗教理解に貴重な視点が提供され大いに参考になる。そこには宗教者以上に宗教を深く追究し思索した成果がある。

世界の「宗教現場」に何度も足を運んだ実体験も興味深いのが、日本人にとつての宗教という点から親鸞、日蓮、本居宣長、そして迫害のキリシタンたちをめぐる考察が評者には刺激的だ

平沼、米内内閣で外相を務めた有田は日独伊軍事同盟に異を唱え、日米開戦に否定的だったため右翼の暗殺リストに挙げられたほどだった。

戦中は早期戦争終結を求め上奏文を提出するなど努力を続けた。描かれる外交の内幕はドキュメンタリー風の面白さで、資料的価値も高い。書名は片山哲や風見章と憲法擁護国民連合を立ち上げたとき「グズ哲、ノロ章、バカ八に何ができる」と揶揄されたが「ソロバンに合わぬことをやるバカに世間からは見えたかもしれぬ」と言つて怒りもしなかったところから。昨今まれな自分を客観視できる骨のある人物だった。

③ 先の大戦と冷戦における通説を検証する飯倉章・森雅雄『太平洋戦争と冷戦の真実』（芙蓉書房出版、2200円）は異色の歴史本である。

った。その上で内村鑑三、新渡戸稲造などにおける「日本人の心の基軸」が今の時代に新たな重要性をもつて浮かび上がるように思われた。著者は昨今の国家神道への回帰には警鐘を鳴らしているが、良くも悪しくも宗教が人と時代を動かしてきたこと、そしてこれからもそうであるろうことを、我がこととして自問し続けることが求められていると改めて痛感させられた。

② 有田八郎といえば都知事選で2度惜敗し、料亭「般若苑」の女将との仲を三島由紀夫『宴のあと』で描かれプライバシー裁判になったことでも知られる。とはいえその真骨頂は戦前の外交面での活躍にある。有田八郎『馬鹿八と人はいう』（中公文庫、1100円）は風雲急を告げる日本外交を回想して読み応えがある。広田、

森「戦艦大和の掩護」は大艦巨砲主義にとらわれ航空機を軽視した日本という通説を、飯倉「うつろうパールハーバーの記憶」は米国人にとつての「リメンバー・パールハーバー」反日論の虚実を、驚くべき文献渉猟で鮮やかに覆し常識を疑うことの重要性を提示する。大和、武蔵ファンや「トラトラトラ」好きにとくにお薦めしたい。

④ 山田英生編『書痴まんが』（ちくま文庫、858円）は書に関わる漫画アンソロジー。ほどほど読書家で漫画もお嫌いであれば十分楽しめるだろう。冒頭のフローベル『愛書狂』（辰巳ヨシヒロなど3編）で好調に滑り出し、「巻物の怪」（水木しげる）や「ぼくの手塚治虫先生」（永島慎二）もいい。なお書痴とは本ばかり読んでいる人を嘲弄している言葉である。（浅野 純次）